

高松市内遺跡発掘調査報告書

西植田町所在

じんないじょうあと

神内城跡

2017年3月

高松市教育委員会

## 例　言

1 本書は、高松市内遺跡発掘調査報告書であり、高松市西植田町地内に所在する神内城跡の調査成果を収録した。

2 調査地、調査期間及び調査面積は、下記のとおりである。

調　査　地　： 香川県高松市西植田町3557番地ほか

神内城跡・神内家墓地

調　査　期　間　： 平成21年12月1日～平成22年3月31日

平成23年2月1日～平成23年3月31日

平成25年3月6日～平成25年3月29日

平成26年3月14日～平成26年3月31日

平成27年2月23日～平成27年3月31日

平成28年3月4日

調　査　面　積　： 調査対象平面積約3,300m<sup>2</sup>

3 調査は、高松市 創造都市推進局 文化・観光・スポーツ部 文化財課 文化財専門員 大嶋和則及び小川賢、並びに非常勤嘱託職員 中西克也、片桐節子、西尾明美及び上原ふみが従事した。

4 整理作業は上原が行った。

5 本報告書の執筆及び編集は、上原が行った。

6 本調査にあたっては、藤尾八幡神社宮司 吉田重幸氏及び地権者の方々の御協力を得た。

7 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は座標北を表す。

8 調査にあたり、基準点の打設については株式会社四航コンサルタントに委託した。

9 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。

## 目 次

第Ⅰ章	調査の経緯と経過	1
第Ⅱ章	地理的・歴史的環境	4
第Ⅲ章	調査概要	9
第Ⅳ章	伝世資料による神内一族	16
第Ⅴ章	まとめ	19

## 挿 図 目 次

第1図	神内城跡周辺地形	1
第2図	神内城跡縄張り図	2
第3図	神内城跡の位置	4
第4図	周辺主要遺跡分布図	5
第5図	神内城跡測量図	7~8
第6図	調査区内構構平面図・壁面土層図	11
第7図	出土遺物実測図	13
第8図	神内城跡周辺配置図	15
第9図	史料に見られる神内氏系図	18

## 挿 表 目 次

第1表	調査実施期間・内容一覧	3
第2表	出土遺物観察表	20

## 写真図版目次

写真 1	神内城跡近景（北方向より）	21	写真 10	大手道（西方向より）	24
写真 2	神内家墓地及び神内城跡北端裾部 (西方向より)	22	写真 11	從郭南端堀切（東方向より）	24
写真 3	藤尾八幡神社より神内城跡近辺を望 む	22	写真 12	從郭東側犬走（西方向より）	24
写真 4	SD01掘削状況（北方向より）	23	写真 13	從郭（西方向より）	25
写真 5	調査区掘削状況（東方向より）	23	写真 14	從郭土壘（西方向より）	25
写真 6	調査区掘削状況（北方向より）	23	写真 15	神内右近守政成の墓	26
写真 7	主郭西側帶曲輪（北方向より）	24	写真 16	神内左衛門太郎重尚の墓	26
写真 8	主郭北西端堀切（南方向より）	24	写真 17	宝鏡印塔	26
写真 9	主郭北端切岸・腰曲輪（東方向より）	24	写真 18	神内家墓地（近世）	26
		24	写真 19	神内佐渡頭重次の墓	26
		24	写真 20	神内家墓地（分家）	26

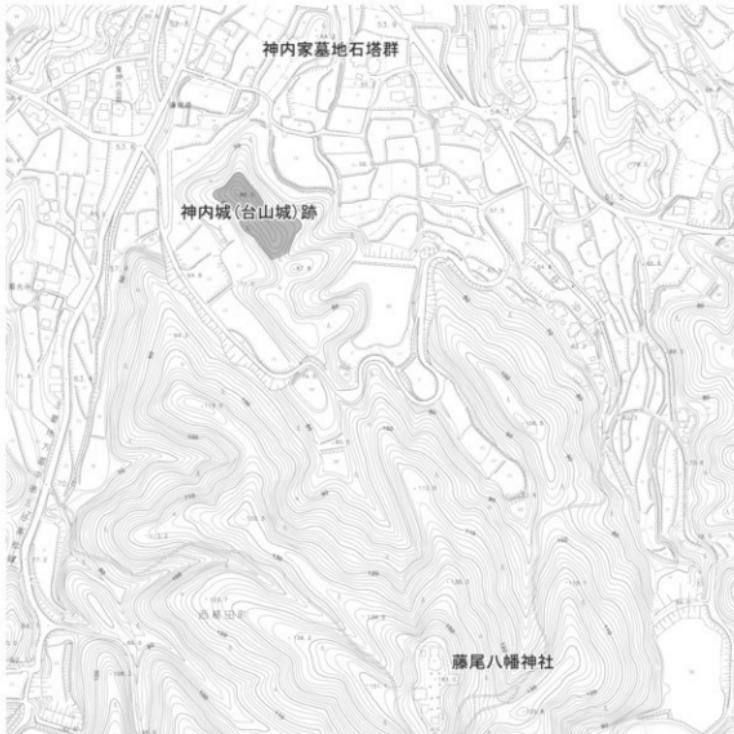
# 第Ⅰ章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

高松市西植田町中谷所在の神内城（台山城）跡は、中世在地領主神内氏の山城跡である（第1図 神内城跡周辺地形）。これまで昭和57年の池田誠氏による調査（第2図 神内城跡縄張り図）、平成9～14年度実施の「香川県中世城館詳細分布調査」（香川県教育委員会 2003）がなされている。

讃岐山脈から派生する北向きの尾根の末端に築城された城であり、現在は一部烟化による改変が認められるものの、連郭・土堀・堀切などの遺構の存在が認められる。

地形的には背後に山塊を備え、東西に川が流れるという立地的好条件に構えることから、台山及び神内一族が葬られた墓所が所在する尾根先端部までの高台部分を含めた範囲が神内城の縄張りと推定されている。遺構の保存状況がよく、墓地や神社も残り、中世的景観を留めている点などが評価できることから、文化財指定も視野に入れ、その実態解明のための調査を実施するに至った。



第1図 神内城跡周辺地形 (S=1/5,000)



第 2 図 神内城跡縄張り図 (S=1/4,000、図：池田 誠)

## 第2節 調査の経過

神内城跡の北東山裾先端に当たる神内家墓地については既刊（高松市教育委員会 2005a）のように、平成13年3月15日～17日に調査が実施され、五輪塔・集石群・宝篋印塔等に関する報告がなされている。当墓所の石塔群は全国的な例にもれず、経年のうち、小型化する傾向があるとともに、各石塔の材質・成形手法等を考慮すると、墓地開創の時期と南北朝期の関東武士の西国移動と定着の時期に関連性を見出すことが可能であることが明らかにされた。

城跡に関する調査としては、上述のとおり、山頂部において現況で主郭・從郭が認められることから、この付近を中心に平成21年度より下記の期間において、確認調査を実施した。

表1 調査実施期間・内容一覧

	実施期間	調査内容
1	平成21年12月1日～平成22年3月31日	確認調査（発掘・測量）
2	平成23年2月1日～平成23年3月31日	確認調査（測量）
3	平成25年3月6日～平成25年3月29日	確認調査（測量）
4	平成26年3月14日～平成26年3月31日	確認調査（測量）
5	平成27年2月23日～平成27年3月31日	確認調査（測量）
6	平成28年3月4日	確認調査（踏査）

現状では、台山頂部を中心に遺構の存在が認められる。山頂部は2つの曲輪で構成され、高所の主郭にあたる曲輪とこれを取り囲む一段低い曲輪が南西部に広がる。この一段低い曲輪には土塁がL字状に配され、主郭との境付近には虎口状の空間が認められる。頂部南側の鞍部は堀切となっているほか、斜面部にも小さな曲輪がいくつか存在する。

発掘調査では、トレンチを主郭の北部に設定した。表土から30～40cmで、基盤層と考えられる風化した花崗岩に達した。竹の根による搅乱は基盤層にも及ぶが、柱穴、土坑、溝跡等を検出した。出土遺物は小片が多いものの、陶磁器、土師質土器、鉄釘、石材が認められ、中世後半を中心としたものと推定される。

## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央に位置し、市域の大部分は瀬戸内海に北面した高松平野が占める。高松平野をはじめ讃岐平野に特徴的な地形の一つである標高200～300m程のメサ、あるいはビュートと呼ばれる小山塊に囲まれ、西は讃岐山脈から五色台へと続く山地、東は立石山地が座する。また、讃岐山脈より北流する本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川が運んだ土砂によって形成された農耕に適する沖積平野である高松平野は温暖寡雨な瀬戸内海性気候のため、古くから溜池が多く築造された。春日川の上流で支流の朝倉川へと分岐する付近は、古くから植田と呼ばれ、その山間部末端に位置する丘陵地に神内城跡は所在する。

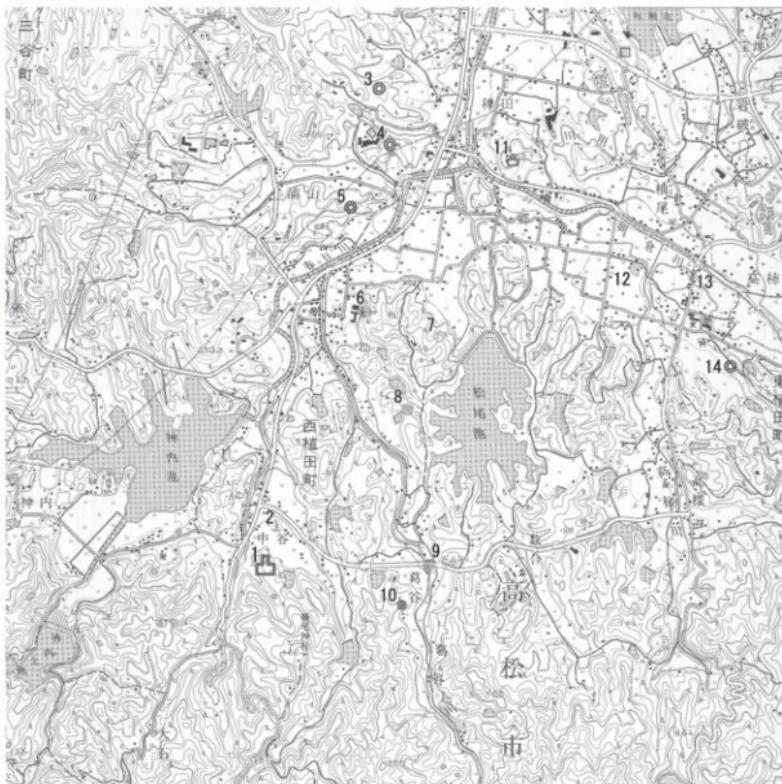
### 第2節 歴史的環境

調査地の周辺は、古代において讃岐国山田郡に含まれる。『倭名抄』によれば往時の山田郡には「殖田」「蘇甲」「池田」「三谷」といった郷名が見られ、現在の東・西植田町、十川東・西町、池田町、三谷町に該当すると考えられる。

これらの地域において確認されている遺跡を時系列に見ると、最古に当たるのは竹元遺跡である。縄文時代晚期後半の土坑と自然河川が確認されている。弥生時代では、光専寺山遺跡がもっとも古ないとされ、小丘陵の裾より前期末の土器包含層が確認されており、環濠が存在した可能性を指摘する意見がある。中期末から後期初頭に属する中山田遺跡は丘陵部に位置する高地性集落である。焼失痕を持つ竪穴住居跡や倉庫跡等が検出されたとともに、分銅形土製品が出土している。通谷遺跡でも中期末の土器が出土すると共に、後期後半の土器棺墓が7基確認されている。後期後半に属する竹元遺跡では、竪穴住居跡や大溝・土坑が検出されている。葛谷遺跡も後期の遺跡で、ベッド状遺構を有する竪穴住居跡が検出されているほかに、有茎銅鏡が出土している。円義寺遺跡では後期末以降の土器棺墓が4基確認され、切谷遺跡でも後期に属する土器棺群の出土が伝えられている。このように、後期になると遺跡数が増加する傾向が見られ、この動向は高松平野中央部と連動して



第3図 神内城跡の位置



1 神内城跡	2 神内家墓地石塔群	3 尾越古墳
4 大龜古墳群	5 本村古墳群	6 切谷遺跡
8 円義寺遺跡	9 葛谷遺跡	7 松尾摩寺
12 下司麻寺	10 備蓄錢等出土地	11 稗田城跡
13 竹元遺跡	14 東植田八幡馬場先古墳群	

第4図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/25,000)

いるようである。

古墳時代では、集落跡については不明だが、数多くの古墳が確認されている。円義寺遺跡では前期に属する直径8~30mの円墳3基が調査されており、粘土床をもつ竪穴式石室3基や箱式石棺1基とともに、銅鏡が1面出土している。同じ前期と推定される川東1号墳からは、銅鏡1面と玉類が昭和5年に出土しており、円墳と伝えられている。西尾天神社古墳は、直径3.5m、高さ約4mを測る二段築成の円墳で、墳頂部に竪穴式石室の石材と考えられる安山岩の板石が認められ、中

期後半と推定されている。後期前半に属する尾越古墳は、丘陵頂部に位置する全長36mの前方後円墳で、家形埴輪や円筒埴輪の出土が知られている。大龜古墳群も尾越古墳と同じ後期後半と推定される古墳群で、丘陵上に現存3基、おそらく本来は5基以上で構成され、円筒埴輪や鉄刀、須恵器が出土している。後期後半以降になると、この地域においても横穴式石室を主体部にもつ古墳が多く築造されるようになる。調査されたものでは、中山田3・4号墳で2基、葛谷遺跡で1基の古墳が検出されている。未調査だが、上佐山東麓古墳や東植田八幡馬場先2号墳では石室が開口しており、東植田八幡馬場先1号墳も石材が露出している。他に、光専寺山東・西古墳、池田合子神社御旅所古墳、本村古墳群等が知られるが、時期・内容とともに実態はよく分かっていない。

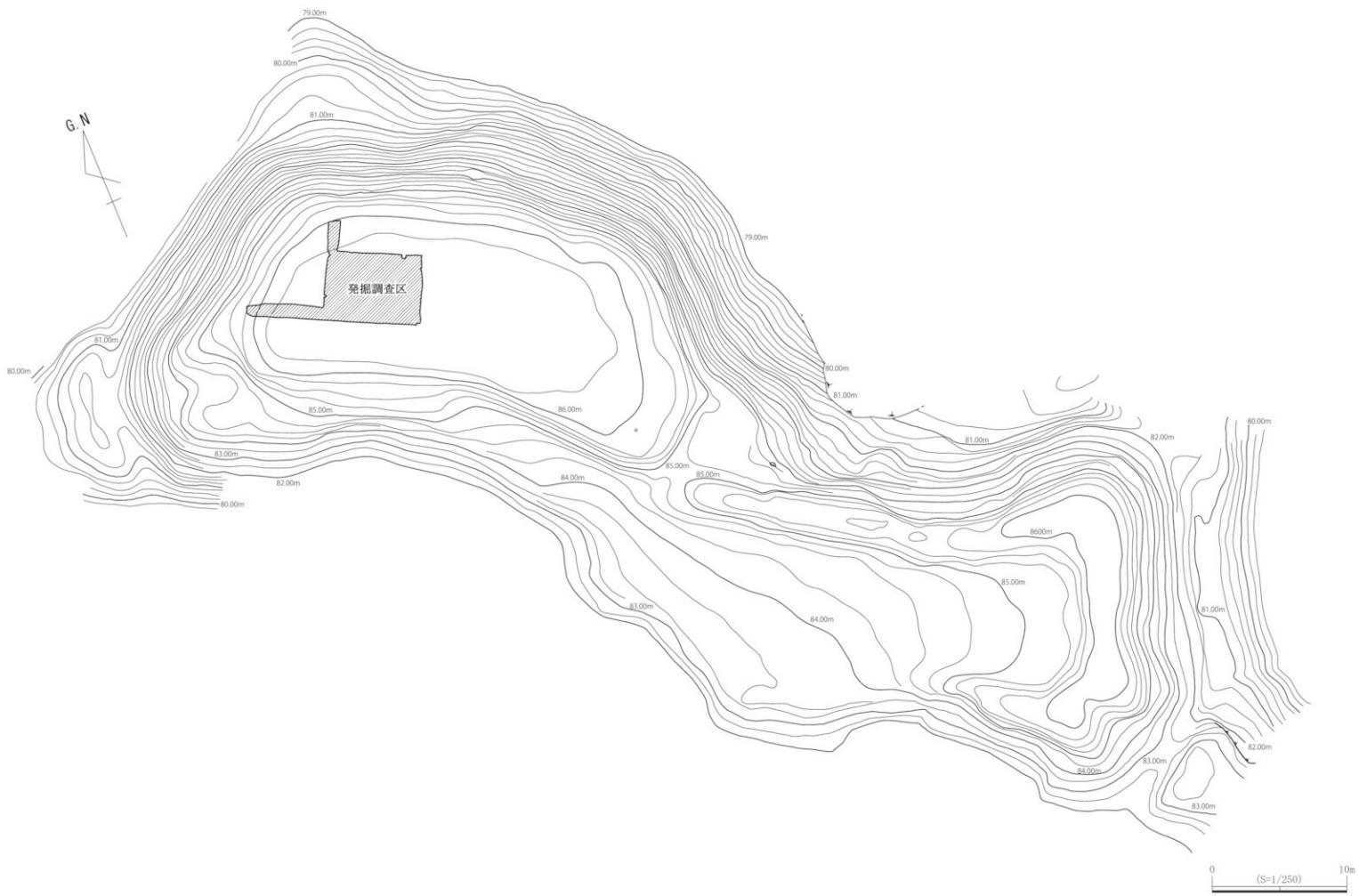
墳墓以外では、古墳時代後期末から飛鳥時代に操業した公済窯群の須恵器窯があり、窯業地域として機能していたことがうかがえる。

飛鳥時代にはこの地域においても古墳造営が終焉し、寺院建築が認められる。下司廃寺では、礎石をもつ基壇が残存しており、塔跡と推定される。周辺からは大和川原寺式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦、せん仏が出土している。ただし、その後見られる軒瓦は平安時代中期又は後期のもので、寺院が継続して維持されたかどうかは不明である。平安時代後期と推定される經宇神社経塚では銅製経筒が出土している。

鎌倉時代から室町時代といった中世で、唯一の調査例である葛谷遺跡では柱穴が検出されている。この葛谷遺跡の近くから開元通宝などの備蓄錢が詰められた甕が出土している。松尾廃寺は丘陵上に位置し、鎌倉時代の菊花紋の軒丸瓦が表採されている。光専寺山遺跡はその名の示すとおり室町時代に光専寺が建っていたと伝えられており、室町時代頃の遺物が表採されている。

室町時代から始まる戦国期の動乱はこの地域にも及び、数多くの城館が造られている。神内氏の神内城、三谷氏の上佐山城（王佐山城）跡・三谷城跡・池田城跡、十河氏の十河城跡、植田氏の戸田城跡・戸田山城跡・稗田城跡がある。神内・三谷・十河各氏は、植田氏一族の三兄弟とも伝えられ、これら四氏がともに提携して活躍していたようである。その中でも戦国末期に頭角を現わしたのが十河氏で、阿波三好氏から十河一存を養子にもらうことで阿波から讃岐にかけて一大勢力を築くものの、土佐長宗我部氏の讃岐侵攻によって、領国からの撤退を余儀なくされる。その後、十河氏は豊臣秀吉の四国平定に従い再び戻ってくるが、九州の戸次川の戦いで当主である十河存保が討死している。以上の合戦等により、各氏族はその勢力を失い、城館も廃絶していったようである。

江戸時代では、この地域は生駒家4代による讃岐一国支配の後、松平家11代による高松藩領となり、明治維新を迎えるのである。



第5図 神内城跡測量図

## 第Ⅲ章 調査概要

### 第1節 発掘調査

#### (1) 調査概要

発掘調査は、平成21年12月1日～22年3月31日の期間に実施した。台山の山頂部には2段の曲輪が遺存し、上段は約400m<sup>2</sup>の面積を占め、弓なりの長方形を呈し、下段はその南側に位置し、西方へ向かって緩傾斜となる。

調査に際し、主郭に当たる上段の曲輪に調査区を設定することを試みたが、竹林に視界を阻まれ、現地形を観察する事が容易でないため、事前に伐採作業を行った。これらの植物根による現地表面下への搅拌は随所に及んでおり、調査区は当初東西方向に12m、南北方向に7m長で幅1mのT字型に計画していたが、遺構確認が十分に行えないと判断し、後にこの交点から北東に東西6m、南北4m幅で拡幅した。

#### (2) 基本層序

地表面を覆う植物根を含めた表土、下位に明黄褐色シルトが層序をなし、焼土・被熱塊を含んだ砂質シルト層、疊混じりシルト層が重なって、淡黄色花崗岩を基盤層とする。概ね、表土から基盤層までの深度は30～40cmである。

#### (3) 遺構と遺物

主なものとして柱穴、土坑、溝跡を確認することができ、同時に遺構検出面では焼土や被熱した石片を部分的に検出した。遺物は中国産青磁・白磁、染付、備前焼、土師器、鉄釘等多様性に富んでいる。細片が多いものの、中世後半の時期を中心としたものと推定される。

#### SP01（第6図）

調査区南壁に接するため、壁面で層位の観察ができた。比較的平坦な底部を持ち、最大径は約32cm、深度は平均約35cmを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色シルトまじり細砂、出土遺物は土師質土器片である。細片のため、図化していない。

#### SP02（第6図）

SP01の北側に位置する。直径約60cm、東側にテラスを持ち、深度約67cmを測る。埋土は10YR6/3にぶい黄橙色シルトまじり粗砂～細砂、小碟と土器細片を含む。出土遺物は土師質土器（第7図1）、同種鍋類細片である。1は皿である。全体はナデ調整が施され、底部に回転ヘラ切りの痕が認められる。

#### SP03（第6図）

SP02の北西に位置する。長径約55cm、短径約25cm、深度約60cmを測り、下端とほぼ同面積のテラスを伴う。焼土塊が出土している。

### 第Ⅲ章 調査概要

#### SP04（第6図）

SP03に隣接して位置し、調査区壁面に接する。最大径約20cm。比較的平坦な底部を持ち、焼土等をまばらに含んだ2.5Y6/4にぶい黄色砂質シルトの埋土が堆積する。鉄釘片が出土している。

#### SP05（第6図）

当初設定した調査トレンチ交点付近に位置し、梢円形を呈し、長径約7.5cm、短径約3.5cm、深度最大約5.5cmを測る。周囲に他に遺構は検出していない。赤褐色を呈した備前焼大甕片、焼粘土塊、炭が出土している。これらは細片のため、図化していない。

#### SP06（第6図）

調査区中央に位置する。二股の形状を呈しており、両翼はどちらもテラスを備え、深度は約2.6cmを測る。

#### SP07（第6図）

拡張した調査区の中央に位置し、一部削平を受けていたが、長径約5.0cm、短径約4.0cmのほぼ円形を呈する。深度は約4.0cmを測る。約3.5cm大の焼土塊を検出している。

#### SP08（第6図）

調査区北側に位置し、SX02の上位で検出した。直径約4.0cmの円形を呈し、深度約3.5cmを測る。地山花崗土塊をまばらに含んだ2.5Y6/4にぶい黄色砂質シルトの埋土が堆積する。赤褐色を発する備前焼大甕片が出土している。細片のため、図化していない。

#### SP09（第6図）

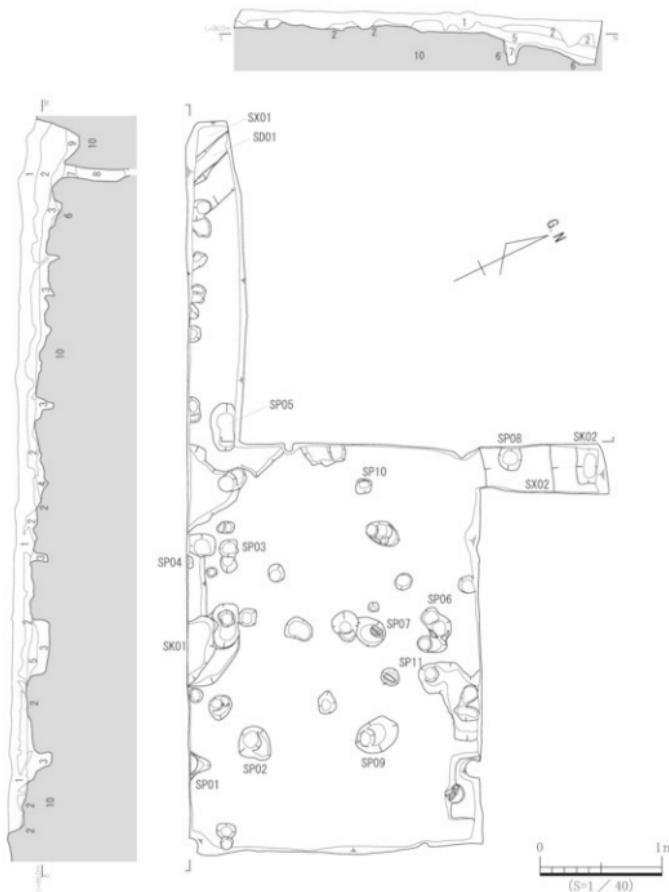
SP01・SP02の延長線上に並ぶ。長径約7.5cm、短径約5.0cm、深度約5.6cmを測る。土師質土器片、被熱した粘土塊、鉄片、磁器（2）が出土している。2は龍泉窯系青磁鉢で口唇部が輪花、外面は片彫が施される。雷文帯を想起させる文様が特徴的である。

#### SP10（第6図）

調査区中央に位置し、SP09・SP07の延長線上に並ぶ。方形を呈し、一边は約2.5cmを測る。深度は約5.0cmにおよぶ。遺物は出土していない。

#### SP11（第6図）

SP07の東に位置する。長径約3.0cm、短径約2.5cm、深度約8.0cmを測る。被熱した粘土塊、土師質土器皿（3）が出土している。内外面ともにナデ調整が施される。細片のため、底部の調整は観察出来ない。



1. 表土（植物根（竹）を含む）
2. 明黄褐色（2.5Y6/6）シルト
3. にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質シルト（地山・花崗土塊・焼土・炭化物をまばらに含む）
4. にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質シルト（被熱花崗土塊を多く含む）
5. にぶい黄色（2.5Y6/3）裸混シルト
6. にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質シルト（地山花崗土塊を多く含む）
7. にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質シルト（地山花崗土塊をまばらに含む）
8. オリーブ灰色（10Y4/2）シルト質粘土（被熱花崗土塊を含む・側壁鉄分沈着著しい・しまる）
9. にぶい黄色（2.5Y6/4）砂質シルト+裸混砂質シルト（地山・花崗土塊・焼土・炭化物をまばらに含む）
10. 淡黄色（5Y8/3）花崗岩（風化著しい）地山

第6図 調査区内遺構平面図・壁面土層図 (S=1/40)

**SK01（第6図）**

調査区南側に位置する。長径約105cm、短径約40cm、深度約45cmを測る。焼土等をまばらに含んだ2.5Y6/4にぶい黄色砂質シルトの埋土が堆積する。土師質土器皿（4）が出土している。前掲の同種皿（1・3）に比べ、胎土・調整・焼成に差異が観察できる。底部の残存は乏しい。

**SK02（第6図）**

調査区北端に位置する。長径約55cm、短径約30cmの方形を呈し、深度は約26cmを測る。遺物は出土していない。

**SD01（第6図）**

調査区西端のSX01の下位に位置する。長径約75cm、短径約30cmを測る。深度は約100cmにおよび、埋土は調査段階では2層認められた。上位は2.5Y6/4にぶい黄色砂質シルト層で地山である花崗土塊をまばらに含む。下層は10Y4/2オーリープ灰色シルト質粘土層である。被熱花崗土塊を含み、側壁は鉄分沈着が著しく縮まった層位である。下端についてはさらに下位に延伸しており、検出しきれていない。遺物は出土していない。

**SX01（第6図）**

調査区西端の傾斜地に位置する。埋土は地山花崗土塊・焼土・炭化物をまばらに含んだ2.5Y6/4にぶい黄色礫混砂質シルトである。遺物は出土していない。

**SX02（第6図）**

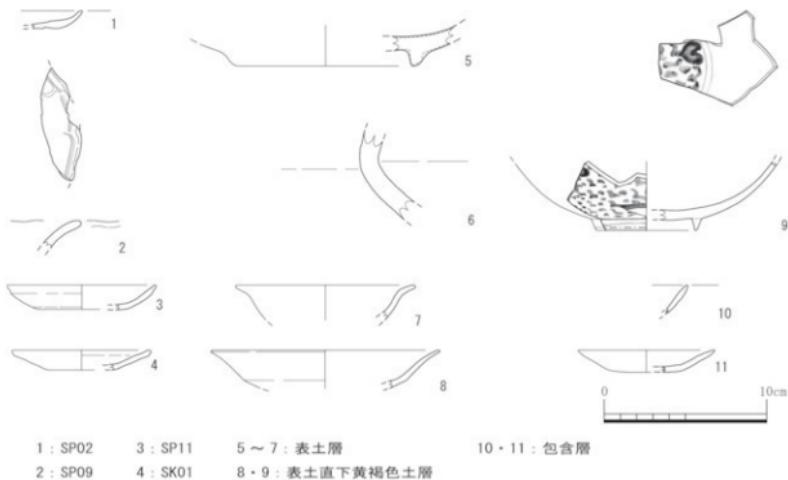
調査区北側にSX01と同じく斜地に位置する。SP08に切られる。地山花崗土塊を多く含んだ2.5Y6/4にぶい黄色砂質シルトの埋土が地形に沿った形状で堆積する。遺物は出土していない。

**その他**

5～7は表土層から出土したものである。5は中国産青磁の皿である。この断面から高台の素地が鋭角形成、さらに丹念な施釉が観察できる。外底においても釉剥ぎはなされておらず、露胎が見られない。6は備前陶器の甕の頸部である。全体に回転ナデによる調整が観察でき、一部外面に自然釉が認められる。7は中国産の青磁の皿である。全体に施釉されている。素地と施釉が類似していることから、5と同一個体の可能性がある。

8・9は表土直下の黄褐色土中から出土したものである。8は中国産の白磁の皿である。白色の素地上に透明釉が施されている。9は磁器の碗もしくは鉢である。豊付のみ露胎で、他は施釉されている。明青色の呉須を内外に染付、高台に圓線が描かれており、中国産磁器の特徴を備える。

10・11は包含層から出土した土師質土器皿である。10は口縁部のみ遺存し、胎土に金雲母を含有。器厚は約0.3mmを測る。11は比較的の遺存しており、推定法量の算出が可能である。口縁端部の調整が丁寧に施されている。



第7図 出土遺物実測図 (S=1/3)

#### (4) 小結

発掘調査による遺構・遺物の検出は、神内城跡が埋蔵文化財包蔵地であることを改めて立証した。柱穴、土坑、溝跡から出土した遺物は中世後半を中心としたものと推定される。SD01は曲輪縁辺に位置し、これを境に地形面の変化が著しいことを鑑みると、その担った役割を想定することができよう。柱穴は所々並列が見られ、建物跡が想定できる規模をもつものがある。

### 第2節 測量調査

#### (1) 調査概要

台山の頂部は標高8.8mを測り、頂部北側高段の主郭には帶曲輪が備わり、虎口を挟んで南東に従郭が連結する。従郭の東・南辺は鍵形に曲がった約2~3m幅の土塁が築かれている。山裾には数段の狭長な腰曲輪が巡り、主要部を開んでいる様相が観察できることから、地権者の承諾が得られた台山の山頂部を中心に地形測量を行うことで城跡の範囲と内容把握を目的とした。また、調査に伴い視界を遮る竹林などの伐採作業は測量作業に応じて行った。測量に際しては、可能な限り2.5cm間隔で等高線を測り、近年の明らかな改変並びに地崩れについてはその等高線を省いた。

#### (2) 調査成果

測量結果から、神内城跡は主郭・従郭の主要部を中心に北西方向に張り出した自然地形を最大限活用して築城されたことが明らかになった(第5図)。

まず主郭については、高松平野を眺望できる頂部北端尾根に配されており、外敵からの侵入を阻むため、周囲の斜面を削り取り、切岸が設けられていた。尾根先が西側へと延びる部分については

弧状に堀切を配していた。北裾に曲輪と考えられる空間が認められるが、こちらも堀切であった可能性がある。頂部縁辺に土星などの堤状の遺構は認められない。山麓より直線的に主郭に接近することが阻まれるため、入城に際しては連なる従郭の山裾を通過するルートに限定される。このルートは直線的な上り坂になっており、枠形虎口状小空間へと連なる。この空間は主郭と従郭の境にある。この近辺では遺構・遺物を検出していない。主郭の南西部については、畑化による改変が大幅に認められるため、一定の等高線以下については調査を行っていない。

従郭は現状において主郭とほぼ同等の面積を有するが、主郭ほど平坦な空間ではなく、1. 5m以上の比高差をもって東から西へと傾斜する。とりわけ存在感を示す土星は主郭から虎口を挟んだ位置を起点に主郭の軸と並行して東西方向へと延び、東部は折れ構造を呈する。同時にこの北東隅において土星の幅は際立って広くなる。当地点は下方に設けられた犬走りから虎口へ繋がる進入路を見渡せる位置にあたることから、隅櫓などの存在が想定される。また、この土星の南東隅及び土星が切れる曲輪の南斜面には等高線から堅堀の存在が見られる。周囲の山裾には2～3段の狭長な腰曲輪を巡らし、主要部を囲んでいる様相が確認できた。さらに従郭は東側背後へと連なる尾根の鞍部を利用した落差の大きい堀切を配している。この空堀の南裾に平坦地が認められるが、墓地が造成されており、畑化による改変の可能性が否めない。

#### (3) 小結

このように神内城跡は主郭と従郭の主要部を中心に構成されている。改変は多々認められるものの、主要部全体の両端を切岸で遮断したうえで、山頂の主郭への入城を容易にさせない構造が各所に見られ、その築城目的が単なる居館建築ではなかったことは明らかであると考えられる。進入路としての直線的なのぼり坂を迎撃するよう土星が従郭縁辺に配されていることもこの根拠を裏付ける。進入路が東の麓から山腹にさしかかる付近を起点に虎口まで土星は並行するように設けられ、その起点から南に折れ、鍵状を呈して延伸する。土星の終点付近には堅堀と考えられる形状を等高線が示すことを考慮すると、上記の進入路の他に南東方向への防御の必要があった可能性を考えられる。残念ながら、山麓付近の開墾により解明には至っていない。

## 第3節 踏査

#### (1) 調査概要

前年度までに蓄積した測量図を基に台山頂部のみならず尾根先全域とその山麓、周辺の踏査を実施し、讃岐山脈から伸びる当地の地形及び縄張り範囲の再確認を行った。

#### (2) 調査成果

神内城跡が位置する台山は丘陵部に当たり、東西には川が流れ、背後には藤尾山山塊が迫る立地にある。

神内城の縄張りについては、当初、神内家の中世墓地の北側と台山の西側に位置する池を繋ぐようになかつて堀状の溝が存在したとされていること、東側については南東部の池につながる水路や大

きな段差が認められること、南部は背後の山塊と分離していること、以上から台山と前述の墓域までを含めた高台部分全体を範囲と推定されていた（香川県教育委員会 2003）。

今回の踏査による検討では、まず畑化と改変により、北側と西側の池を繋ぐ堀状の溝と原地形が現状では確認できること、南東部の池はため池としての山池である可能性が高く、この付近での開墾や道路整備による近年の改変が著しく認められるところから、推定した縄張り城を積極的に取り入れることは難しいと考える。また、神内家墓地と神内城跡は同じ高台上には存在するものの、双方の間は広く切り開かれており、原地形の復元が難しい。よって、現段階で神内城の縄張りを定義するならば、標高約 6.4.2 m の中世の神内家墓地を含まない標高約 6.6 m 以上に配された台山丘陵部のみを範囲として括ることが妥当である。

墓域と台山丘陵部の周間に広がる平地には集落が展開されており、「城屋敷」・「本屋敷」・「内屋敷」・「中屋敷」・「庵屋敷」・「的場」・「弓場」・「小庭」といった屋号が今なお存在し、常時の居館やその配置の名残を読み取ることができる。これらの周間に堀や土塁といった防御を固めたものは現在見ることができないが、地域を支配する拠点を担ったことは明確である。

また、現在、神内家の墓域として知られているのは、前掲の中世のもの他、台山北麓に位置する江戸期の墓所であるが、踏査の結果、台山の南東部に位置する池より台山山裾にかかる付近にも天明・文化・文政～昭和 1 年に建墓された 40 基余の墓域が見られた。聞き取りの結果、神内家分家のものということが判明した。



第 8 図 神内城跡周辺配置図

### (3) 小結

山城と墓地は双方ともに神内氏に縁あるものであるものの、近年の開墾による改変がこれらのことろどころに見られることから、現状で城の縄張りを積極的に範囲づける場合、丘陵部に留めるのが妥当である。丘陵部は自然地形を最大限活用し、選定された立地であることは確かであり、加えて眼下に城下構造の名残を残す集落が広がり、背後には山塊が聳え、そこに縁の深い藤尾八幡神社が鎮座するという位置関係を今なお保っている稀有な事例であり、中世の景観を考察する際の貴重な資料と考えられよう。

## 第IV章 伝世資料による神内一族

### 第1節 神内氏奉納鏡

神内城跡の背後に聳え立つ藤尾山は標高163.8mの山頂に藤尾八幡神社が鎮座する。眼下には松尾池及び神内池をはじめ、屋島や高松平野のほぼ全体を見渡すことができる。藤尾八幡神社はかつて山田郡の親神として崇められ、今なお西植田地域の鎮守として厚い信仰を受けている。

創建については用明天皇（530年代後半から551年ごろの生まれと推定される）の時世、あるいは養老年間（717～724）に行基の手によるものなど諸説がある。神内諸氏による勧請や奉納も伝えられており、神鏡である亀甲地双鳥鏡と菊花散双鳥鏡の2点が藤尾八幡神社奉納鏡として平成11年8月5日に市有形文化財に指定されている。

亀甲地双鳥鏡は面径10.9cm、縁高0.7cmを測る。亀甲地に向き合う2羽の鳥が配され、鏡面に「藤尾八幡」の線刻が認められる。保元2年（1157）に神内右近政成による奉納と伝えられているが、鎌倉時代の所産である。

菊花散双鳥鏡については面径9.1cm、縁高0.8cmを測る。双鳥紋が亀甲地上に配されることと上述の亀甲地双鳥鏡と同様であるが、亀甲地に菊花が描かれている。永正元年（1504）に神内佐渡頭重次が奉納したとされている。室町時代の所産である。

前掲の亀甲地双鳥鏡はその帰属時期が社伝と相違あるものの、神社の歴史の古さを物語っており、藤尾八幡神社と神内氏との強い関係を示すとともに、この地域における中世の信仰形態を知る貴重な資料になっている。

### 第2節 神内家墓地石塔群

神内家代々の墓地は現在、城跡が残る台山の各所に建立されている。主に台山を中心に南北に分かれており、北側は山麓から北東へ延びる尾根上には近世墓地、北端の高台部分には中世墓地と2か所認められる。南側の墓地については、近世から昭和にかけての墓碑が数基認められ、比較的新しいものである。

とりわけ北端の中世墓地については、平面 $60 \times 20$ mの不整形を呈する林となって残されており、100数基の五輪塔群が現存する。これらの基底には集石による基壇状の遺構も見ることができる。平成13年度に実施した現地調査によって、これらは鎌倉時代後期から室町時代の所産であることが判明し、地方武士が墓所を形成し始めるのは元寇以降南北朝期に見られる傾向であること、関東武士が西国へ移動、定着する時期を考慮すると神内家墓地もその年代観にほぼ符号することが明らかになった（高松市教委 2005a）。

墓地最古と考えられる石塔は没年保元2年（1157）とされる神内右近政成のものと伝承されているが、そこまで遡るものではない。また、墓地内最大の塔で、組み合わせも本来のものと考えられる石塔は神内左衛門太郎重尚のものと伝えられている。重尚は長寛2年（1164）～元久2年（1205）に生存した畠山重忠の次男とされており、建暦元年（1211）に藤尾八幡神社

の賽蔵建立及び隨神奉納の功が伝えられ、没年は宝治2年（1248年）とされる。本塔は13世紀後半以降の所産と考えられ、伝承の年代とはやや齟齬をきたす。墓地開創の時点で家祖の石塔も造られたと考えると所産時期との差異に合点がつく。

その他、墓地の南西方向に当たる畠中から宝篋印塔がほぼ完存した状態で出土している。時代的には南北朝末から室町初期のものと考えられ、表面には整形時のノミ痕が明瞭に残されており、製作技法を考える上でも重要な遺品といえる。

なお近世の神内家墓地は、先述したが神内城跡と中世墓地との間、神内城跡から北東へ延びる尾根の途中を削って造営されており、ここにも五輪塔が建立されている。個々の石塔の年代から、中世墓地は尾根の先端から中腹へと展開するに対し、近世墓地はこれとは逆方向に展開すること、加えてこれら墓地の西側に所在する「城屋敷」との位置関係から、かつて現有の道路と一致するような墓道が存在したことも想定される。宝篋印塔出土付近も含め、墓域はさらに広がっていたと推察できる。

### 第3節 史料における神内氏記述

神内城に拠を構えた神内一族については、讃岐地方にまつわる歴史書（『全讃史』、『古今讃岐名勝図絵』、『讃岐国名勝図会』、『南海通記』、『新撰讃岐国風土記』、『讃陽古城記』）及び同氏関係史料（『神内氏系圖畧記』、『爺は宮に』）などにおいて、その名を追い求めることができる。『神内氏系圖畧記』は時期不明だが、藤尾八幡神社宮司宅に伝わるものであり、神内氏についての概略が記されている。また、先代宮司により記された『爺は宮に』は『神内氏系圖畧記』等を基に記されたと想定される。

いずれの史料もその記述に多様性が見られるものの、次の3点については類似する。まず景行天皇の第17皇子神櫛王の末裔と出自を示し、三谷・十河といった地元氏族と同族関係であること、神内岩見守広忠（神内右近守政成）が源平屋島合戦に源氏方として参じたということ、そして神内自雲（神内佐渡頭重次）が藤尾八幡神社を再興させたということである。

また、歴史書・氏関係史料の両者の大きな相違については、神内氏の系譜である。前掲の神櫛王の末裔であるという類似記述とともに神内氏史料においては、平安時代後期に武藏国の武将畠山重能の弟、畠山重満が讃岐国植田郷にて養子となり、神内右近頭政成を名乗り神内城を築いたと伝えている。前節で触れたように鎌倉時代前葉と後葉といった時間差は否めないものの、西国における墓地造成の起点が関東武士による西国への移動と関わりがある点を考慮すると、氏の血筋を関東地方に求められる点は大変興味深く、移住後、養子縁組や婚姻などを通じて地元の有力氏族と同族關係を紡いでいった可能性が充分考えられる。

次の違いは神内右京進景之・清定父子の取扱いである。神内氏史料においてはこの父子への言及が見られないものの、『全讃史』などでは、木太郷にも神内城を築き、植田に300石と木太に700石を領していたとされる。木太郷神内城の存在については、発掘調査によって確認されており（高松市教委 2005b）、その立地環境は要城的役割を担うものあることがわかっている。木太郷神内城は高松平野に強大な力を及ぼしていた香西氏勢力の支城である松繩城と向城の間でかつ至近距離に拠す。これは高松平野南東部で絶対的な勢力を有していた十河氏による香西氏への牽制戦略と考

#### 第IV章 伝世資料による神内一族

えられている（秋山 1982）。神内氏史料によると植田郷の神内城は最後の城主を神内新之守重長として、戦国末期まで存在している。つまり、景之・清定父子が移住した後も、植田に神内氏は留まり、勢力を有していたと考えらえる。



第9図 史料に見られる神内氏系図

## 第V章　まとめ

以上のように中世在地領主神内氏はその領地であった「殖田」に自然地形を活用して築いた山城と平地に展開した居館を拠点として、外敵から地域を護り支配した。とりわけ、神内城は春日川の上流の山間部末端に位置していることで、背後を山塊に守られているだけでなく、東西の双方に川が流れ、前方に広がる平野部を一望できるといった利点を兼ね備えていた。平地の居館以外にこのような防御性を兼ね備えた立地に詰城を築城したということは、その機が争乱の時期であったことが推察される。これまでに見てきた諸史料から神内氏の創始は関東武士の西国への移動が布石となって関係しており、最期の城主とされる神内新之守重長が戦国時代末期に仙石秀久により領地を召し上げられ、牢人となるまで、長期間にわたって一族は榮枯盛衰の途をついた様相がうかがえる。

神内城跡は、開墾や竹害による改変が多々見られるものの、自然地形を最大限活用し築城された山城跡である。今なおその周囲には一族の墓域、麓の平地には当時の居館の名残があり、庇護した神社も同じ地域に鎮座するという位置関係を保っている稀有な事例であり、中世の景観を考察する際の貴重な資料と考えられよう。

今回は讃岐地方における歴史書、及び神内氏関係史料における神内氏像を追ったが、同氏と同族とされた三谷及び十河両氏の史料等による記述も検討する必要がある。

また、神内城跡は、昨今の中世城館の研究の中で、築城技術に前期織豊系との関わりがあるとされる重層曲輪や横堀、椿形虎口、堅堀、土塁が特徴として捉えられ、池田誠氏分類によると「山城・丘城系占地城郭」に区分される（香川県教育委員会 2003）ため、今後は類似資料等の蓄積及び比較、これらの技術傾向から、築城に係った月日、労働力、経費等から統治者の財力を算出するというアプローチも中世在地領主神内氏及び神内城の様相解明に一助をなすのではないだろうか。

### 参考文献

- 秋山 忠 1982 『古城跡を訪ねて』高松市の文化財 第7編 高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会
- 円養寺遺跡発掘調査団 1971 『高松市円養寺遺跡調査概報』
- 香川県教育委員会 2003 『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
- 梶原 藍果・藍水 1853 『讃岐国名勝図会』
- 片山 駒次郎 1846 『讃陽古城記』（『香川叢書』第二巻所収 1941）
- 香西 成資 1663 『南海通記』（『南海通記 四国軍記』所収 歴史図書社 1976）
- 高松市教育委員会 1999 『讃岐国弘福寺領の調査－第2次弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書－II』
- 高松市教育委員会 2005a 『神内家墓地石塔群－香川県高松市西植田町所在五輪塔群・宝鏡印塔の調査－』
- 高松市教育委員会 2005b 『木太町 神内城跡～第2次調査～』
- 三谷郷土史編集委員会 1987 『三谷郷土史』
- 山田町史編集委員会 1968 『山田町史』
- 吉田 重福 1974 『爺は宮に』

第2表 出土遺物観察表

報告番号	出土遺構	種別	器種名	法量			調整		色調			胎土	焼成	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	胎土 内面	釉薬 外面	典須			
1	SP02	土師質土器	皿	-	(1.1)	-	ナデ	ナデ、底部回転ヘラ切り	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙		普1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
2	SP09	磁器	青磁鉢	-	-	(1.7)	陰刻の施釉、片彫	施釉、輪花(口縁部)	7.5Y7/1 灰白	10Y6/2 オリーブ灰		微1mm以下の長石・黒色粒を含む	良好	貰入有
3	SP11	土師質土器	皿	(9.2)	(1.5)	(4.2)	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙		普1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
4	SK01	土師質土器	皿	(8.3)	(1.2)	(4.4)	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/6 明黄褐	10YR8/6 黄橙		普1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
5	表土層	磁器	青磁皿	-	(11.0)	(2.5)	施釉	施釉	5Y7/1灰白	5Y5/3灰 オリーブ		微	良好	貰入有全面釉
6	表土層	陶器	備前焼甕	-	-	(5.5)	回転ナデ	回転ナデ、自然釉	5Y6/1灰白	5YR4/2 灰褐		細1mm以下の石英・長石・黒色粒を含む	良好	
7	表土層	磁器	青磁皿	(10.9)	-	(2.2)	施釉	施釉	N8/灰白	5Y5/2灰 オリーブ		微	良好	
8	表土直下黄褐色土層	磁器	白磁皿	(13.9)	-	(2.4)	施釉	施釉	白色	透明		微	良好	
9	表土直下黄褐色土層	磁器	棕もしくは鉢	-	(6.2)	(4.3)	染付(見込み)、施釉	染付、施釉、露胎、貼付高台、圓線	2.5Y8/2 灰白	透明	明青色	微	良好	貰入有小孔有中国産か
10	包含層	土師質土器	皿	-	(1.8)	-	ナデ	ナデ	2.5YR6/6 橙	5YR7/6 橙		普1mm以下の石英・長石・金雲母を含む	良	
11	包含層	土師質土器	皿	(8.4)	(1.4)	(4.4)	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙		普0.5mm以下の砂粒を含む	良	

## 写真図版



写真1 神内城跡近景（北方向より）



写真2 神内家墓地及び神内城跡北端据部（西方向より）



写真3 藤尾八幡神社より神内城跡近辺を望む



写真4 SD01 挖削状況（北方向より）



写真5 調査区掘削状況（東方向より）



写真6 調査区掘削状況（北方向より）



写真 7 主郭西側帶曲輪（北方向より）



写真 8 主郭北西端堀切（南方向より）



写真 9 主郭北端堀切岸・腰曲輪（東方向より）



写真 10 大手道（西方向より）



写真 11 従郭南端堀切（東方向より）



写真 12 従郭東側犬走（西方向より）



写真13 従郭（西方向より）



写真14 従郭土塁（西方向より）



写真15 神内右近守政成の墓



写真16 神内左衛門太郎重尚の墓



写真17 宝篋印塔



写真18 神内家墓地（近世）



写真19 神内佐渡頭重次の墓



写真20 神内家墓地（分家）

## 報告書抄録

高松市埋蔵文化財調査報告第178集

高松市内遺跡発掘調査報告書

西植田町所在  
神内城跡

平成 29 年 3 月 31 日

編集／発行 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目 8 番 15 号  
印 刷 有限会社 河端商会